

黒田龍之助著「その他の外国語 - 役に立たない語学のはなし - 」

現代書館 2005年3月20日刊を読む

## 1. 英語を教えるということ

(1)最近、英語の教師になってしまった。自分でもビックリである。

(2)大学の教師が勤め先を変えるのは、さほど珍しいことでもない。でも教える科目まで変えてしまうというのは、さすがにあまり聞かない。

どうしてそういうことができたのかといえば、それはいまの勤め先の人たちが認めてくれたからである。理工学部の英語の先生が中心となって多くの人を納得させてくれたおかげで、英語教師として働けるようになった。深く感謝いたしております。

(3)語学教師であり続けたい。

研究なんてたいしてやっていないけど、専門は相変わらずロシア語やその他のスラヴ諸語である。ほかにできない。でも地域ではなくて言語のスペシャリストでありたい。ロシアの専門家ではなく、言語の専門家になりたいのだ。だからロシアの経済や外交よりも、たとえばセネガルのウォロフ語文法のほうに興味がある。言語だったらなんでも面白い。

(4)ところが一つの言語だけと向き合っていると、いつか飽きてしまう。わたしは飽きっぽくて、地道にコツコツ、この道一筋というタイプではない。ロシア語だけでなく、ウクライナ語やチェコ語、さらにリトアニア語など、たくさんの言語に触れてきた。幅広く世界中の言語のことを考えるのが好きなのである。

(5)世界中の言語に興味があるのだったら、英語だってそのうちの一つと考えるべきである。多くの言語に触れるなんていいながら、英語だけ避けていたらインチキだ。言語が平等であるなら、英語だって仲間はずれにはいけない。そう考えて、それじゃあ英語教師をやってみるか、という気になったのである。

(6)ただし英語教師になったからといって、急に英語を礼讃するつもりはまったくない。英語一つしかできないクセに、世界を制覇したような気分にいるヤツは間違っている。そう思っているところは、以前となんら変わるところがない。英語に限らず、単一言語の世界はつまらない。一つの言語にしか興味がなくほかの世界のを否定するようなのは、面白くないのである。

(7)こうして、英語を教えるようになった。

とはいえ経験不足の新米英語教師である。ふつうの英語教師のようにはいかない。英米文学に関する知識も足りない。英語圏の歴史や文化についても不案内である。その分を言語学の知識などでなんとか補う。あとは一生懸命予習するしかない。

(8) 英語を教えるときに、二つの方針を立てた。

英米事情は教えない。

世界にはいろいろな英語があることを伝える。

については、わたしの信条である。それに加えて、英米文化について教えられるほど知らないということもある。こちらのほうが大きい。

(9) どうして日本中で英語を勉強しているのか？それは英語が国際共通補助語として大きな役割を果たしているからである。英米文化に親しむためではない。経済面と軍事面で圧倒的な影響力をもつ、特定の国の言語だけをこれほどまでに勉強している理由が、ほかにあるとしたら変である。多くの国から人が集まっている場面では、なんらかの共通語がどうしても必要になる。そのとき、歴史的偶然からいまは英語がその役割を担っている。それだけのことだ。で、みんなこれが使えるようになりたいのである。

(10) そこで となる。いま世界で使われている英語は、さまざまなヴァリエーションがある。それが現実なのだ。どの英語が正しいというのではない。アメリカ英語が標準だの、イギリス英語は格式が高いだのという議論がすでにナンセンス。そういうことは、アメリカやイギリスの専門家だけが考えればいい。

(11) 授業で使っている教材で気に入っているものに、J. Yoneoka, J. Arimoto *Englishes of the World*(三修社)というのがある。この中で英語を話しているのは、本当にさまざまな国の人だ。オーストラリア人やニュージーランド人のような英語圏の人でも登場するけれど、それよりも面白いのは日本人や韓国人、ドイツ人、タンザニア人、フィリピン人などの英語。全 20 カ国の人々が話す英語を聞き取っていく。

(12) そのリスニングは正直いってかなり苦労する。ふつうの教材にあるお手本の発音とはだいぶ違う。でもこれが現実の英語。学生たちもはじめは戸惑っていたけれど、だんだんと慣れてきた。中には東南アジア英語を聞き取る達人が現れたりする。それだって一つの能力。将来、いろいろな英語を話す人たちと友だちになってくれたら嬉しいなあ。

(13) さらに授業の最終回では、ここに出てきた人たちの母語を聞かせる。これは自分でテープを編集して作った。韓国語、ドイツ語、スワヒリ語、タガログ語など、学生たちにとってはその名称すら聞いたことがない言語もあるかもしれない。このような不思議な音の流れに耳を傾けながら、それがどこの言語なのか当てていく。そして世界が多様であることを実感してもらう。

(14) 英語をきっかけに、多様な言語の世界に広く興味をもってほしい。そう思って英語教師になったのである。

## 2. 機内では教科書を

- (1)突然だが、会話集は海外旅行で役に立たない。
- (2)まずなんの知識もない言語を、カタカナを頼りにぎこちなく発音したところで無駄である。そんな付け焼き刃で相手が分かってくれるほど外国語は生易しいものではなく、ましてや喜んでくれることは皆無と考えたほうがいい。
- (3)さらに会話集には役に立つ表現が載っていないという文句もよく聞く。そもそも外国語会話といえども、人間の発するものである。その会話が予想のつくような限定されたものだったら、苦勞はない。そのうえ面白くない。旅行一つとってもこれだけ多様化している現在、百や二百のフレーズで事足りるはずがないのだ。
- (4)だったら何を読むのか。わたしは最近、機内で外国語の教科書を読むようにしている。
- (5)フィンランド語の国名チェックのあと、わたしがカバンから取り出したのは栗原薫ノマルユットウ・コウリ『CD 付 フィンランド語が面白いほど身につく本』(中経出版)である。題名が安っぽいハウツーものみたいところが残念だが、内容は非常によい。ヘルシンキ経由でヨーロッパ行きを決めたときから、通勤電車の中で読んでいたが、飛行機の中でも改めて目を通す。この教科書には実用会話や基本単語もまとめてあって、旅行にももちろん役立つ。ただわたしにとっては、付け焼き刃のフレーズより、動詞の変化パターンや文の組み立て方を知るほうが、現地に行かずと楽しい。実際、ヘルシンキの街角で看板やポスターを見ながら、「おお、Helsingissa というのは Helsinki のイネッシーヴィという格で、場所を表わしておるのだな」などと確認する。こういうことに喜びを感じるのは、あまり一般的でないかもしれない。
- (6)会話集の悪口をいったが、では存在価値がないかということそうではない。会話集はむしろ授業中に使ってほしい。ふだんの外国語学習の中で、また作文などをするとき、例文として参考にすればいいのである。またふだんから現地に出かけることを夢見ながら、会話集を暗記するのもいい。先日も小田急線の中でイタリア語の会話集を広げている青年を見かけた。ときどき本から目を離して何かを考えているような様子だったが、思えばあれはフレーズを暗記していたのかもしれない。見ていてなんだか嬉しくなる光景だった。
- (7)機内では教科書、通勤電車では会話集。一見すると矛盾しているように思われるかもしれないが、これがわたしの至った結論である。

P194 ~ 195

### [コメント]

英語好きになる秘訣、特に英語の先生が英語好きになる秘訣を書いた本で黒田先生に優る先生はいないと舌を巻く本。

- 2010年9月26日 林 明夫記 -